

『パラリーガル』とは言えないけれど

今回原稿を依頼され、正直なぜ私が？と戸惑ってしまった。
テーマが「パラリーガル」と聞いてなおさらだ。

法律事務所職員 中野 明日香

業界 11 年

個人の法律事務所で9ヶ月働いた後、現在の法律事務所に就職し約11年になる。個人事務所にいた頃は、弁護士2人、事務員も2人という規模なので電話の応対や、準備書面のワープロ打ち、裁判所回り等何から何まで先輩に教わりながら広く浅く仕事をしていたが、今の事務所は弁護士16人、事務員10人という規模なので受付、外回り（書面作成や裁判所回り）、会計（経理）といったように事務員の仕事が分担され、効率的に仕事を回すようになっている。そのため11年働いてはいるものの、受付を3年、途中育児休業2年を挟み、ここ4年ほどは会計の仕事を担当し、いわゆる法律事務所職員のメインというべき外回りの仕事は1年半ほどしかしておらず、パラリーガルなどというには余りにおこがましい。

事務員が毎日のように出向く裁判所、法務局、区役所等に代わって私が毎日足を運ぶのは銀行である。破産や差押の書類を作る代わりに私がいつも向かう書類は大量の入出金伝票類であって、普通の法律事務員の仕事とは違っている。また事務所が扱う事件に関する様々なお金の管理といった経理の仕事に加えて、給料計算、職員の健康保険などの社会保険の手続き等々、総務的な仕事も加わるので法律事務の知識よりも簿記や社会保険の知識のほうが今の私には馴染みがあるといってもよい。

会計の仕事の難しさ

会計の仕事で難しいと感じていることをいくつかあげてみよう。まずは、数字が一人歩きしてしまうと間違いを見つけるのにとっても苦勞することだ。常にこの数字には間違いがないかを意識していないといけいないのだ。漢字や文章であれば文脈から間違いに気づく機

会があるが、数字に関しては、一度書き間違い（入力ミス）をしてしまうと、なかなかその間違いに気づきにくい。そのために常に検算が重要なのだが思い込んで記入した数字の間違いにはやはり気がつきにくいものである。たとえば入金伝票に数字の0をひとつ多く書いてしまったために5,000円が50,000円入金したことになり、夕方、金庫のお金が45,000円足りないのはなぜかということ突き止めるのに20分以上時間を費やしてみたり…。つまらないことだがひとつ一つの作業に確認が重要と痛感する毎日だ。

ほかにも事件に関連して「100万円を○月○日までAさんに送金してください」という弁護士の指示に、100万円が何のお金か、またどういう計算のもとに出された数字なのか、Aさんは相手方なのか、依頼者なのか、会計の立場ではわからないまま送金に行かなければならないケースも時にはある。確認したくても弁護士と連絡が取れず期限に間に合わせるためとりあえず銀行へ、という場面もなくはないので非常に神経を使う。

迷いはあれど

日々忙しく会計の仕事に追われながらも迷いが無いわけではない。この業界に12年近く働いているのに破産の申立書一つも作れない。差押の手続きもあやふや。とてもパラリーガルとは言い難い。しかし卑下していても仕方がない。同僚の事務員が利息計算や訴額を計算する一方、私は銀行の送金手数料を計算し、源泉徴収税を計算し、事務所の確定申告をする。すべての仕事を私がするわけにはいかないのだ。私が自分の仕事をしなければ、やはり事務所は回っていかない。パラリーガルとしてのサポートはできなくとも自分のこなす仕事が少しでも弁護士を支え、事件の解決につながっていくのだとの思いを忘れず今後も努力を続けていくのだろう。